

モンペリエの街並みから学ぶフランス人の発想のしなやかさ（2008年4月26日掲載）

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 林 千宏

(2004年～2006年ロータリー国際親善奨学生としてフランス・モンペリエに滞在)

### 中世よりの大学都市モンペリエ

フランス南部の都市モンペリエはとりわけ古くから栄えた町として知られている。中世よりモンペリエ大学の医学部はヨーロッパ中にその名を知られ、また、フランス・ルネサンス期の作家ラブレー、イタリアの詩人ペトラルカ、あるいは予言集で有名なノストラダムスもこの地で学んでいる。フランス最古の植物園があるのも、ここモンペリエである。



コメディ広場写真

### モンペリエの旧市街

モンペリエの中心部である旧市街は中世以来改築や改修あるいは増築が繰り返され、町は細い通りが入り組みながら迷路のような趣を呈している。私がロータリー国際親善奨学生としてこの町にやってきたばかりの頃はよく迷ったものだった。



なかにはパリの改造計画で有名なオスマンが設計した通りもある。確かにモンペリエの旧市街のなかではひときわ立派な通りだが、この通りを作るために、あまり計画的ではない無茶な建物の取り壊しが当時行われたのだと、ある地元の建築家は古い町の地図を指し示しながら嘆いておられた。

この複雑に入り組んだ街並みは、どの通りを通っても味わい深くその都度発見がある。白い石畳で舗装された狭い通りを歩いていると、古の詩人達の世界に迷い込んだような気分がして、ルネサンス文学を専門とする私は胸が躍ったものだ。

この地区を保存するために、モンペリエ市は旧市街の車での進入を厳しく制限している。旧市街の住民以外が車を乗り入れる際には警察署から許可をもらわなくてはならない。だがこの規制

のおかげで安全に街歩きができるし、排気ガスも少ない。街の外周を2000年頃に開通した路面電車が走っているため不便も感じない。

一方で、あらゆるものをただ規制するのではなく、人が生活する空間であり続いているというのも魅力的な点である。夏至の日にフランス各地で行われる音楽祭の時には、モンペリエ旧市街のあらゆる場所が即席のコンサート会場となる。細い道の一角が区切られ、コンサートが行われていたかと思えば、広場はディスコ会場となっていたりする。町が思わぬ表情を見せ、生き生きと輝く瞬間である。

### 新市街アンチゴーヌ地区

しかし、この歴史的旧市街には既にもう広がる余地がないため、1980年代から旧市街の南側に新市街が作られた。この街はアンチゴーヌ地区と呼ばれている。カタルーニャの建築家リッカルド・ボフィルが全ての設計を行った地区で、極めて斬新、且つ統一感の取れた街並みは、全ての通りの名、広場の名がギリシャ・ローマ神話に由来して付けられており、町のいたるところにギリシャ彫刻のレプリカが置かれている。このように古代文明と現代的な建築が融合した街並みは時代を重ねて出来上がった旧市街の一種混沌とした町並みと著しい対照を成している。しかし、こうした新と旧、秩序と混沌、現代と古代（歴史）という両地区のコントラストによって、それぞれが互いを新たな角度から照らし合う効果を生み出している点は見事としか言いようがない。



アンチゴーヌ地区

### 「ヨーロッパ広場」

私が住んでいたのはこのアンチゴーヌ地区で、アパートの前の広場は「ヨーロッパ広場」(esplanade de l'Europe) という名であった。シンメトリー構造からなるアンチゴーヌ地区の突き当たりに位置するこの広場、牛に変身したゼウスに連れ去られる乙女エウローペーの神話を考えるなら、「エウローペー広場」と訳すのが妥当であろうか。古代の円形劇場を髣髴とさせるこの広々とした半円の広場は、そうした神話をも思い起こさせる趣で、円の中心にはサモトラケのニケのレプリカが立っている。つまり、古代神話の中でもとりわけ

ヨーロッパの語源エウローペーの名を冠する広場の中心に、翼をもった「勝利」の像が置かれているのだ。ここにこの町の理念が現れていると言えば穿ちすぎであろうか。すなわち、しっかりと



esplanade de l'Europe

と自らの源流（古代文明）を見据えつつも、時にそれを大胆に変化させていく。そこにこそヨーロッパの真の発展・飛躍があるのだという考え方である。

### フランス人と伝統

私がフランスでの生活で感銘を受けたのは、これらの街並みに象徴されるフランス人の発想のしなやかさであった。いかに古く、時に不便な町並みであろうと、無闇に機能的な近代建築に建て替えるのではなく、これまで守られてきたその街並みの美しさを大切に保存し、より美しいものになる場合にのみ、そこに新しいものを大胆に融合させていく。その発想の根底には、自らも町の歴史の一部であることを自覚し、伝統を博物館に閉じ込めるのではなく、日々の生活に取り入れて「楽しむ」ことで文化を深めていく姿勢があるようと思われたのである。そしてこの姿勢こそが伝統の厚みなのだと、町を歩きながら肌で感じたのだった。